

目次

はじめに

10

序章 「小さな世界都市」の萌芽

19

旅の始まり／まちが目指す目的地はどこか／地方創生とは何か？／
豊岡の人口減少の要因／なぜ豊岡は選ばれていないのか／
「小さな世界都市」実現の可能性

第一章 コウノトリも住めるまちを創る

32

—— 「小さな世界都市」のためのエンジン①

絶滅から復活へ／なぜ野生復帰なのか？／「も」の発見／

コウノトリとの出会い／コウノトリの野生復帰は世界的価値がある／
兵庫県議会での質問で野生復帰を促す／「コウノトリ議員」誕生／

「深さ」と「広がり」の発見／「小さな世界都市」との出会い／

「低温発酵熱」と「一歩ずつ、一歩ずつ」／理に訴え、情に訴える／

環境と経済の相克／野生復帰を進めるプレーヤー／豊岡市長に就任／

「コウノトリ共生推進課」の設置／農薬を使わずに米ができるか？／

まちが沈んだ／こんちくしょう、こんなことしやがって！／

「七人の死」は存在しない／上を向いて歩こう／六〇〇本のバラの花／

アートを止めるな／「コウノトリ育む農法」の確立／

「農薬vs.無農薬」の構造から抜け出すには／

コウノトリ育む——生きものと共生する農法／

コウノトリを育む——生きものを増やす農法／

コウノトリが育む——殺虫剤・除草剤に頼らない農法／

自然の理に合う農法と売る努力／環境と経済の関係に答えを／

円山川水系自然再生計画／コウノトリ自然放鳥／

第二章

コウノトリ、沖縄・サンエーとの縁を結ぶ／コウノトリ、韓国へ／
「コウノトリ育むお米」、ニューヨークへ／イスラエルで広まるコウノトリ物語／
イギリス・バードフェアに出展／野生復帰事業の主体は誰か／
地域振興戦略の要／川の水より魚の方が多かった？／子どもたちの物語／
お米を東日本に送ろう！

受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ

——「小さな世界都市」のためのエンジン②

城崎温泉の異変／Best Onsen Town／北但大震災からの復興／暴力団追放／
契約入浴料制度と色浴衣の導入／インバウンド対策の本格化／
意思決定を速く／大交流課の設置／まちづくりの土台をなすもの／
いったい何を求めて豊岡にやってくるのか？／豊岡観光イノベーション設立／
なぜ観光で地方創生なのか／観光は総合コミュニケーション／
豊岡靴の躍進と新たな挑戦

第三章 深さをもった演劇のまちづくり

144

——「小さな世界都市」のためのエンジン③

舞台の幕開け／出石永楽館の復活と永楽館歌舞伎／赤字施設をタダで貸す／アーティスト・イン・レジデンスの可能性／

「城崎国際アートセンター」オープン／滞在アーティストを観光大使に任命／城崎国際アートセンターの直営化／平田オリザさん、芸術監督就任／

平田オリザさん、豊岡へ／江原河畔劇場オープン／

芸術文化観光専門職大学の誘致／構想を広げる／構想にアートを据える／

専門職大学構想検討会スタート／開設目標年度と学長候補／

芸術文化観光専門職大学開校！／「芸術文化観光」を学ぶ／

大学誘致の経済効果／まちを活気づける豊岡演劇祭／豊岡演劇祭開催の主目的／

生活文化観光と重層的文化観光の可能性／豊岡演劇祭の費用対効果／

教育への展開——ローカル&グローバルコミュニケーション教育／

なぜ演劇でコミュニケーション能力が向上するのか／

第四章

ジェンダーギャップの解消

212

——「小さな世界都市」のためのエンジン④

なぜコミュニケーション能力が大切なのか／
演劇ワークショップによる非認知能力の向上／演劇なんかいららない？／
多様性を受け入れるまちへの変貌／創造の地へ／
深さをもった演劇のまちづくりとは何か／認知症と演劇的介護

恐ろしい現実
に直面／なぜ豊岡の若者、とりわけ若い女性が減るのか？／
ジェンダーギャップ対策をスタート／根強いジェンダーギャップの存在／
女性たちの反乱／なぜ地方に若い女性が戻ってこないのか？／
ジェンダーギャップの問題点／この順番でいいのか？／
ジェンダーギャップ解消戦略／どんなことをやってきたか？／
メディアへの露出／現れてきた変化／自立と共生

終章 これからのこと——子どもたちへ

254

新たなスタート／中学生と向き合う／子どもたちが教えてくれた／
高校生との約束

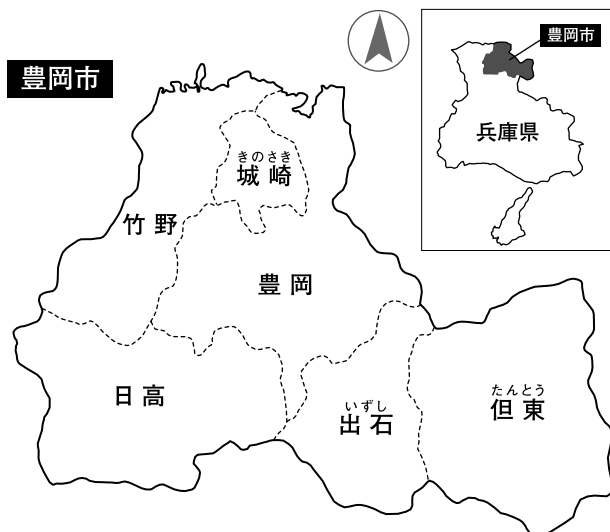
おわりに

263

本書に登場する名称、人物の肩書き・役職名はすべて当時のものです。

図版制作／クリエイティブメッセンジャー

豊岡市基本データ



【概要】 兵庫県北部の但馬^{たじま}地域の中心都市。市の中央部に^{まるやま}円山川が流れ、豊岡盆地を形成。2005年に1市5町（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）が合併し新制「豊岡市」が発足。

【人口】 77,489人（出典／2020年国勢調査）

【面積】 697.55平方キロメートル

【気候】 日本海側気候。2022年の最高気温38.4度
同最低気温マイナス3.6度（出典／気象庁）

【交通】 鉄道で大阪駅から豊岡駅まで約2時間30分、航空機で大阪国際（伊丹）空港から^{いたみ}但馬空港まで約40分、羽田空港から大阪国際空港乗り継ぎでコウノリ但馬空港まで約2時間。

はじめに

「五年でアジア・ナンバー1、一〇年で世界有数の演劇祭にします」

二〇二〇年、豊岡演劇祭を始めるにあたって、フェスティバルディレクターの劇作家・平田オリザさんが私たちに伝えた言葉です。片田舎の小さなまちでそんなことが可能なのかと訝^{いぶか}る私たちに、平田さんは、事もなげにこう続けました。

「カンヌ国際映画祭のカンヌの人口は七万人、世界で最も成功した演劇祭の一つ、アヴィニオン演劇祭のアヴィニオンは九万人、豊岡は八万人弱。まったく問題ありません」
「確かにそうだ」

私たちは、納得しました。

コロナ禍で開催された豊岡演劇祭2020は、日本中でさまざまな公演が中止となる中で「表現の場を守った」という思いがけない評価も得て、上々のスタートとなりました。

私は、約三〇年間——最初の一〇年間は兵庫県議会議員として、後の二〇年間は豊岡市長として——豊岡のまちづくりに携わってきました。

まちづくりは、ある事柄が、「私」ではなく、「私たち」にとってどういう意味を持つのかに関わる営みです。

まちづくりの主体である「私たち」には、そこに住む人々はもちろん、まちづくりに共鳴して外から関わる人々も含まれます。その「コミュニティ」をどこまで広げることができるか。私たちは、それを世界にまで広げる努力を重ねてきました。

兵庫県の北部に位置し、但馬^{たじま}地方にある豊岡は、「小さな世界都市—Local & Global City—」を目指しています。

私たちは、「小さな世界都市」を、「人口規模は小さくても、世界の人々に尊敬され、尊重されるまち」と定義しています。

大都市との格差是正に汲^{きゅう}々とするのではなく、世界を絶えず意識して、世界に通用する「ローカル」を磨き上げて世界で輝く。そのことを通じて、「小さくてもいいのだ」という

堂々たる態度のまちを創ろうという戦略が、「小さな世界都市」です。

これまでに豊岡は、野外で絶滅したコウノトリを人工飼育で繁殖させて再び人里に帰すという、世界で初めての試みに成功しています。

演劇やダンスなどのパフォーマンスに特化したアーティスト・イン・レジデンスの施設「城崎国際アートセンター（K I A C）」には、世界中からアーティストが滞在制作に続々と訪れ、世界的な認知度を確立しつつあります。

加えて、冒頭で紹介した日本を代表する劇作家で演出家でもある平田オリザさんが移住し、平田さん主宰の劇団青年団も、活動の拠点を豊岡に構えました。さらにアートと観光の両方を学ぶことができる日本初の大学、「芸術文化観光専門職大学」ができ、平田さんが学長に就任するなど、アートの分野でも大きな注目を浴びるようになりました。

インバウンドも、市内の城崎温泉ではコロナ禍前は八年間で四五倍、市全体では五七倍に増えるなど、目覚ましい伸びを示してきました。

「小さな世界都市」への道のりは、まだ途上でしかありませんが、着実に前に進んできました。

本書では、「小さな世界都市」が持つ可能性について、私たちの三〇年にわたる豊岡での実践を基に論じたいと思います。「小さな世界都市」は、地方創生、すなわち、日本の地方で急速に進む人口減少への対応策の旗印となりうると確信しています。

地方における人口減少の最大の要因は、多くの場合、若者、特に若い女性の流出にあります。「生きる場」として彼ら、彼女らに選ばれていないのです。選ばれているのは大都市、象徴的には東京です。経済的にも、文化的にも、社会的にも、大都市が持つ圧倒的な魅力が、人々を大都市へと惹きつけてきました。

とすると、人口減少対策としての地方創生で私たちがやるべきことは、地方に暮らす突き抜けた価値の創造、生きる場としての突き抜けた魅力の創造です。その旗印として私たちが掲げたのが、「小さな世界都市 - Local & Global City -」です。

問題は、その「突き抜け方」です。

大都市と地方の資本力の差は歴然です。大きさや高さ、速さを競っていたのでは、小さ

なまちは、「突き抜ける」どころか、土俵に上がることすらできません。

キーワードは、「深さ」と「広がり」です。

「深さ」というのは、その地の自然、歴史、伝統、文化に根差すことを意味しています。それぞれの地方の自然、歴史、伝統、文化を「資本」として捉え、そこに新たな価値を付与して磨き上げるということです。

私たちは、「小さな世界都市」の「小さな」を、「Small」ではなく「Local」と訳していますが、その地のローカルなものに深く根差すという意味を込めています。「小さな」はローカルのことだという認識に、私たちは、長い実践の中で辿り着きました。

「広がり」というのは、端的に、世界とつながることを意味しています。かつては、地方の小さなまちが世界と直接つながることは、ほとんど不可能でした。しかし、今や小中学生でも自分たちのことを世界に向けて発信し、世界の人々とつながることが可能になっています。

世界は（そして日本も）グローバル化によって急速に同じ顔になりつつある一方、今なお、互いに違う顔をしたマルチ・ローカル、つまり「ローカルの複合体」です。

ローカルを障壁と捉えて画一化したいと考える世界観もあれば、ローカルが並び立ち

繚乱りょうらんする世界を楽しみたいと考える世界観もあります。私たちの「小さな世界都市」が前提とするのは、後者です。マルチ・ローカルという言葉で表現されるその複合体こそが、私たちの「主戦場」です。

地方創生とは、「より大きく、より高く、より速いものこそが偉い」とする一元的な価値観との闘いであるとも言えます。豊岡は、「深さ」と「広がり」を極めていこうと努力を重ねてきました。

「小さな世界都市」という言葉は、しかし、「具体的に何でもって世界に突き抜けるか」については何も語ってはいません。それぞれの地にさまざまな可能性があるはずです。

あるまちが、仮に「小さな世界都市」を目指すとして、「ローカル」のどの部分にどのような光を当て、世界に飛び立つためのエンジンにするのかは、それぞれの地のやり方があります。

豊岡の場合は、①コウノトリの野生復帰、②受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐまちづくり、③深さをもった演劇のまちづくり、④ジェンダーギャップ解消の四つです。これを世界で輝くためのエンジンとして位置づけています。

地方が若者、とりわけ若い女性に選ばれていないということは先に述べた通りです。その理由は、第一に経済的魅力に乏しいことにあります。そのため、これまでは仕事を創り出すことに力が注がれてきました。

もちろん経済は重要です。しかし、人が「生きる」場として考えた場合、地方が文化的魅力に乏しいことも「選ばれない」大きな理由の一つです。優れたアートに触れる機会はめったにありません。豊岡の例で「深さをもった演劇のまちづくり」が注力するものの中に入っているのは、そういうわけです。

そしてもう一つ。

「女・子どもは黙っている」という地方の風土が、若者、とりわけ若い女性にとって経済的・文化的・社会的魅力を削いでいることにも目を向ける必要があります。仮に仕事がそれなりにあったとしても、「黙っている」と言われるところに帰ってくる人、入ってくる人は、そう多くありません。その風土の象徴とも言える強いジェンダーギャップの存在は、エンジンが逆噴射しているようなものです。

豊岡の「小さな世界都市」の挑戦は、まだまだ途上にあります。しかし、「途上である」こと自体にも意味があります。

経済的にも、文化的にも、社会的にも、「突き抜けて面白いまち」を本気で創ろうとしていると、それを意気を感じた人々が自らの挑戦をかけてやってくる、帰ってくる。そうすることでまちが蘇^{よみがえ}る。そのストーリーを推し進めようということです。むしろ、なお不完全であることが、創造性に富んだ人々を惹きつけるのだと思います。

「そんなことを言うけど、豊岡は特別なのではないか。自分たちのまちには、コウノトリのような、皆がうらやむシンボルはない」と言われることがあります。

確かに、白くて大きなコウノトリは、まちづくりのシンボルとしてうってつけのように見えます。

しかし、かつてコウノトリは田んぼに植えたばかりの苗を踏み荒らす「害鳥」でした。そのコウノトリは、今や「豊かな環境のシンボル」です。この間、コウノトリ自身は何も変わっていません。変わったのは、人間の方です。人間が価値観を変えたのにすぎません。自分たちの地域を「深さ」と「広がり」の中で理解し、そこにあるものに新たな価値を

見出して「資源」と捉え直すことは、それぞれの地域に即したやり方で可能であり、地方創生の極めて有力な、そして地方に残された数少ない戦略の一つと言えます。

さらに付け加えると、「小さな世界都市」という言葉を使うかどうかは別として、日本の各地がそれぞれのローカルを磨き、輝きを増すとするならば、その総和として日本全体も世界の中でさらに輝きを増していくはずです。その意味で、「小さな世界都市」は、日本の多様性戦略でもあります。

それではしばらく、「小さな世界都市」を目指す豊岡の物語にお付き合いください。